



KIFA2006 文化講演 日本の笑い・世界のユーモア

英語落語の師匠でマドンナ

「日本人は笑うのか?」「日本人はジョークを言うのか?」——文京学院大学助教授の大島希巳江さんは、オーストラリアのシドニーで開催された「国際ユーモア学会」に、日本人として初参加した。その時、世界数10カ国の参加者から、上記のような質問が殺到した。1996年のことである。

彼女はショックと屈辱を受ける思いだったという。外国人にとっては、日本人は「真面目」「几帳面」「ユーモアが分からない」「面白くない」などのイメージがあった。そんな実像とは違うイメージを払拭するためにハタと考えた。何をしたら、日本人のユーモアが理解されるか?

「そうだ! 日本独自の芸で、アメリカ建国の歴史より古い落語があるではないか。これはほとんど会話だけでなり立っている芸で、世界に類がない。よし! 落語を通じて、日本のユーモアを、日本の文化を世界に広めよう」

以来10年。大島先生は、大学で専門の異文化コミュニケーション、社会言語学を講義する一方、古典落語の英訳に情熱を傾けてきた。そして、いまやご自身も一席お断をする英語落語界の師匠にしてマドンナでもある。

文京学院大学
大島希巳江助教授
文化講演
& 英語落語



二つの顔を持つ大島希巳江さん。講演する大学助教授(上)と、英語と日本語を操りながら高座で笑わせる噺家(左)だ。

異文化交流はユーモアから

誤解や緊張を和らげる

10月29日(土)、鎌ケ谷市国際交流協会(KIFA)ではその大島希巳江さんを講師としてお招きし、「日本の笑い・世界のユーモア」と題して、文化講演と英語落語の公演を実施した。

会場の鎌ケ谷市総合福祉保健センター6階のホールでは、応募参加した約100人を超す来場者が、大島さんの講演に「なるほど」と心底うなずき、公演に「おもしろい」と腹の底から笑った。

第一部の講演。異文化コミュニケーション、あるいは国際交流には「笑い」とユーモアが重要だと説く。渋谷幕張高校2年の時、アメリカのコロラド州の高校に1年間留学、ホームステイ中のできごと。青山学院大学の大学院生時代、イギリスの有名出版社の女性編集長と初対面の待ち合わせした時のこと。ご自身の体験を例に出してのお話は、分かりやすく説得力がある。

「国や文化が異なれば言葉のニュアンスの取り違い、笑うに



笑えぬ失敗、誤解が生じることがある。そして怒りや緊張状態に発展しかねない。それを和らげ、相互に思いやる、いい関係が作れるのは笑いとうーモアが一番です」という。

英語落語に情熱を注いできた大島さんは、これまで8人のプロの落語家に翻訳した英語落語を教授し、海外20カ国に落語家同行で公演を行って、「日本の笑い」を広めてきた。

笑う反応に差

落語の断の中で、日本人には分かり切った決まりや登場人物でも、外国人には理解できないことがままある。「どうして、そうなるのか?」「なんで、この人はアタマが悪いのか?」と、一席終わったあと、よく質問される。

「欧米人は、笑う反応が早いですね。そのほうが賢いとも思っているのか、オチの前に笑ってしまう。たとえば、『時そば』で“いま何時だい”でワハハとくる。後がやりにくいですね、ウフフ」

(以下、2面に続く)

（「大島先生の講演」1面の続き） 落語は文化を伝える話芸

この『時そば』に限らず落語は、大島さんによると、日本の文化や笑いを伝えるのに最適な話芸だという。

食事するとき、音をたてたり、井を持って食べる習慣は外国にはない。行儀が悪いとされているから、そばをズブッと音を立てて啜り込む情景が理解できない。しかし、日本人は啜る音が粋だと考え、悦に入っている。

そこに文化の差があります。そのあたりが外国人に分かりはじめると、落語家が音を立ててそばを啜ると拍手喝采が起きます。

そして、彼らは本場であんな風に堂々と人前で食べてみたい、日本文化は興味深いからぜひ日本に行きたい、となります。落語はこうして受け入れやすくなるのです」

笑いは敵を作らない

第二部では、大島希巳江助教授が舞台にしつらえた高座に上がる。白を基調に、赤と青をあしらった花模様の明るい着物姿。その花柄は桔梗、鎌ヶ谷市の市花とはなんともタイミングのいいお召し物だ。

ここで彼女は、司会の波多野勝夫研修部会長の紹介で、「文教亭希巳介」師匠に変身する。お題は『動物園』。斬は、怠け者の男と動物園のマネージャーの駆け引き、騙しあいの物語。師匠はこの日は、まず英語でかたり、次にそれを日本語に訳す一人二役の活躍ぶり。100人を超す聴衆は始めは静かに傾聴していたが、徐々に笑いの渦に引き込まれる。大拍手のうちに、英語落語はジ・エンドとなった。会場中の顔は笑顔笑顔だった。

最後に、文教亭希巳介師匠はこう締めくくってくれた。「笑いは敵を作らない。そういう意味で、英語落語は“平和的活動”そのものだと思います。そのため“Sushi”がああオックスフォードの『英英辞典』に載っているように、日本文化の代表として“Rakugo”も載せたいですね」ハイ！。お後がよろしいようで。

第3回「英会話サロン」開催

好評のうちに終わった12月10日の英会話サロン。参加者の熱いご要望に応じて、07年2月に第3回サロンを開催する予定です。詳細は後日、皆さんにお知らせします。

外国の文化、生活に興味をお持ちの方、生の英語で話してみたい方のご参加を歓迎します。

主催 鎌ヶ谷市国際交流協会

☆総勢225人が集う

秋の日のひととき、異文化交流の輪が広がった——鎌ヶ谷市国際交流協会（KIFA）の年

間最大行

事である

「KIFA

A Party

2006」

が11月12



酒井哲郎会長



清水聖士市長

◇◇音楽と踊りと、話して食べて、外国人と

「KIFAパーティ2006



市議会議長の三橋一郎さんの乾杯音頭で全員「カンパニー」。そして実行委員の桶本栄さんの総司会でパーティが始まった。

☆魅了した鎌ヶ谷5中のギター演奏

舞台の幕が上がると、鎌ヶ谷第五中学校の生徒たちによるギター演奏がスタート（写真左）。

同中学のギター部は昨年の全国大会で最優秀賞を受賞。今年は特別金賞という、輝かしい実績を持つ実力派。30人近い生徒たちによるギター演奏を聴くのは始めての人がほとんどで、舞台前には大勢の人たちが集まってきた。

会場のテーブルでは会食も始まり、自己紹介と談笑の音が響く。

☆日本語教室で学ぶ外国人が国旗紹介

しばらくして舞台には、それぞれの国旗を持って、民族衣装を着た中国、ベトナム、フィリピン、ミャンマー、バングラデシュ、インド、ペルー、韓国の方々が並んだ。KIFAの主要な活動になっている、日本語教室に通ってくる外国人たちだ。（写真右）。同教室の先生による紹介に続いて、外国人生徒たちは手に持った自国の国旗の由来と歴史を語った。

続いてキッズ英会話の子どもたち15人が七五三の衣装で日の丸を持って登場。民俗行事の七五三について劇を交えて解説した。

各ブースのほうもオープンし、会場内の参加者たちによって、人だかりになっている。日本語ボランティアの皆さんは、久しぶりに会った「教え子」たちと、懐かしい再会の話に夢中のようす。

日（日）、会員はじめ市民、を含め総勢225人が集い、市総合6階のホールで華やかに開かれた。

始めに酒井哲郎会長から、ボランティア運営について紹介。続いて清水聖士市長から、国言葉でそれぞれ「こんにちは」あり、国際交流に必要なこと、わきまえてお付き合いする、うなパーティは意義があると



舞台では、ニュージランの高校生たちが、今年の夏、ステイの経験を話し、姉妹が歌った『世界で一つだけの花』を披露している。

☆賑わう「お茶席」・舞

会場入り口のロビーには、鉢によるお茶席が設けられ、柿のただき、日本の伝統の作法を、会の皆さんのおもてなしが

舞台では「法典鼓譟」が、総勢12人の皆さんによる、身が会場一杯に鳴り響き、会場のボルテージも一段と上がった。

会食中の何人かの方に伺って来たけど、こんな楽しいイベントで知らなかった。もっと前ですわね」「初めてみる外国キしちゃう」と初参加の人が

☆フィナーレはラテン

さあ、パーティは大詰め。オさん夫妻によるメレンゲダンス。とにかく前と後ろのクネクネ。いつのまにか舞人と一体となって、ラテンの会場は揺れ動く。

いっときの興奮の後は、市長のあいさつがあつて、食んだKIFAパーティは終

近郊の外国人らを
福祉保健センター
た。

KIFAの活動と
と開会のあいさ
出席外国人のお
は」のあいさつが
は、文化の違いを
とが大切、このよ
の祝辞があった。

交流 ◇◇

」盛況



ド・ブースの4人
みに行ったホーム
市ワカタネ高校で
』をギター伴奏で

く「法典鼓瀧」

鎌ケ谷市茶道協会に
お菓子と緑茶をい
体験、和服姿の協
人気を集める。

子ども3人を含む
壮な太鼓と笛の音
内の会食テーブル
ている。

てみると、「初め
パーティがあるなん
から参加したかつ
人が多く、ドキド
ち。

リズムで大興奮

ペルー出身のフリ
ステップの指導が始
と動きながら腰を
とフロアで踊る
リズムにパーティ

平田真裕美実行委員
来て、話して、楽し
事となった。

来賓として隣接の柏市、我孫子市の国際交流
協会の代表者が紹介された。「お茶席」を用意
してくれた茶道協会の代表者から「ぜひお茶席
の方にもお越し下さい」とあいさつもあった。

次に会場にブースを設置したニュージーラン
ド、韓国・ハングル講座、青少年国際交流、ド
イツ、ブラジル、日本語講座、スマイリーキッ
ズ、鎌ケ谷高校料理研究部の代表者が順に紹介
され、ブースへの勧誘スピーチを行った。



(右・写真上から) 鎌ケ谷高校料理研究会、ドイツ、子ども英会話・スマイリーキッズ、
韓国・ハングル講座などで賑わう「交流の広場・ブース」。



パ
ー
ティ
会
場

出会いと交流の場

ブースに人気集まる

★ホカホカ。あんまん、肉まんコーナー。

★鎌ケ谷高校料理研究会。コンクール参加の
紹介パネルと、今年の全国コンクールで3位に
入賞した腕を生かした手作りクッキーをラッピ
ングしてチャリティ販売。「大変美味しい」と
人気ブースの一つになった。キッズたちの応援
で場内をセールに回り完売した。メンバーの一
人・世古有沙さんはこのほど開かれた全国料理
コンクールで3位に当たる優秀賞を受賞した。

★ドイツブース。ドイツ出身のアネッテさん
手作りピクルスやクッキーがふるまわれ、可愛
い人形がたくさん展示されている。

★子ども英会話・スマイリーキッズ。スタン
プラリーとフェイスペインティング。

★韓国ブース。お国の玩具や飴を展示。小物
を販売している。KIFAハングル講座を担当
している李先生と生徒さんたちが、民俗衣装の
チマ・ジューゴリを着て対応している。

★日本語ボランティアのコーナー。教室に通
ってくる外国人たちの出身国の国旗や地図を掲
示、国当てクイズで盛り上がっていた。かつて
の教え子たちも駆けつけ交歓場となっている。

★ブラジルコーナー。ポルトガル語のカード
によるクイズ。ペルー出身の夫妻も来てポルト
ガル語とスペイン語で、南米大陸の隣国による
交流風景が見られた。

★ニュージーランドブース。KIFA派遣で
ロングスティを体験した高校生たちや先輩も参
加、体験談やアルバムを広げアピール。

★青少年国際交流ウォークラリー。主催した
学生メンバーが写真とレポートを掲示し、フェ
イスペインティングで子どもたちに人気。

★UNICEFに募金。会場チャリティの収
益金「鎌ケ谷高校料理研究部・9,500円」、「ハ
ングル講座・2,200円」は、鎌ケ谷市国際交流
協会と連名でUNICEFに募金した。

工夫を凝らし、いろいろ楽しさを演出するブ
ースは、パーティ会場にはなくてはならない交
流のコーナーとして大きな役割を担った。

2006 K I F Aバスツアー

歴史の街・栃木の足利市を訪ねる

歴史の街・栃木県の足利市を訪ねる「2006・K I F Aバスツアー」が10月1日（日）行われた。総勢98人のツアーは秋の一日、30人を超す外国人参加者とともに、日本最古の総合大学といわれる「足利学校」と足利家菩提寺の「ばんな寺」、織物の町・足利の守護神ともいう華麗な「織姫神社」をめぐり、往時の建造物、遺物に触れ日本の歴史文化を見聞した。

「なの花交通」の大型バス2台が市役所を出発したのは7時30分。バスは外環経由、東北道へ。蓮田サービスエリアで休憩、足利市内「太平記館」休憩所に着いたのが予定通り10時ちょうど。

◆「太平記館」に到着

ここを拠点に「足利学校」「ばんな寺」の見学コースを歩く。ボランティアガイドに導かれ校門から由緒ある松の木や門、建造物をめぐり、構内の教場跡や遺物展示を見て歩く。

その後、近くのばんな寺へ移動。儒学学習でにぎわった足利らしく、途中には「論語」の一節を刻んだ門柱などもある。巨大な門のあるばんな寺は目の前だ。七五三参り、赤ちゃんの初参りなど、境内は日本古来の行事で訪れた和服姿の親子連れ、家族連れが多く、寺院の境内は大変な賑わい。

◆「織姫神社」でランチタイム

それぞれに門前の街並みを楽しんで、11時55分バスに集合、昼食休憩地へ。狭い急坂をドライバーさんの巧みなハンドルさばきで上りきると、朱塗りの大きな神殿が高い石垣の上に現れた。足利の地場産業「織物」のシンボルとも

いえる「織姫神社」だ。参加者にはお弁当、お茶、ヨーグルトが配られた。神社前の広場で家族、グループが思い思いに楽しいランチのひと時を楽しんだ。

◆ビール工場で試飲・ラーメン工場で試食とお買い物

バスはここから帰路コース。サントリー利根川ビール工場へ。ガイドの案内でビール原料の実物を見て、次は楽しみの試飲だ。出来立てのピュアな味に「うーん、うまい」。



「足利学校」の構内をガイドの案内で見聞。「ばんな寺」の門前で記念撮影



全員満足顔でバスに集合。次は佐野ラーメン工場へ。ラーメンを一口試食。ここが最後の立ち寄り所でお買い物どころ。鎌ヶ谷へバスはスタート。

◆帰路の車内はゲームで盛り上がる

帰路の車内はゲームタイム。日本古来の手遊び「お手玉」。たて座席列をチームにした「手ぬぐい渡し」。続いて「ビンゴゲーム」。数字が表示されるたびに、ため息と歓声が車内に響く。ゲームの余韻で熱気ムンムン。

バスは外環から松戸市内へ。6時すぎ市役所広場に到着。「お疲れさーん。さようなら」で皆さん、家路についた。

「カオ（米）・ラーム（焼く）」を作る

バンコク出身のカルナさん
道野辺小でタイの文化を紹介

K I F Aでは、道野辺小3年生の授業企画「町の名人に学ぶ」に、広報委員の斉藤カルナさんを3回にわたり派遣、タイの数字、あいさつの言葉や文化を紹介してもらいました。

その第3回目はタイのおやつ「カオ・ラーム」という赤飯に似た料理作りでした。モチ米と小豆を青竹に入れてコナツミルクと砂糖で炊いたものです。=写真



当日は雨の後で火のつきが悪く、灯油や新聞紙で一気に強火になって、竹が燃えて本当の焼き米になってしまい、一部失敗しましたが竹のほのかな香りがあり、甘くて美味しいカオ・ラームが出来ました。給食の後で子どもたちにも大変好評でした。

野趣あふれる料理で郊外に行き、自然の中で食べたら、さらに美味しいのではないかと思います。

（料理のレシピ及び作り方はK I F A事務局まで問い合わせください）

外国の家庭料理を作ろう

外国人の料理人と一緒に、その国の家庭料理を作ります。出来たお料理を味わいながら、パーティもあります。今回の料理人には、ペルー料理、フィリピン料理の講師を予定しています。

日時・2月25日（日）午前10時から
会場・南部公民館
定員・料理講習会28人（パーティのみ15人）
参加費・会員1,000円、非会員1,500円
申し込み締め切り・2月16日まで。

電話・市役所内K I F A事務局
047(445)1141 内線550
Eメール kifa-event@siren.ocn.ne.jp

編集後記

06年最後のK I F A Plazaをお届けします。御覧のように記事は、ほとんどの会員の皆さんがすでにご承知のことで、参加したイベントのものです。K I F Aの公式ホームページ（<http://www.kifa.gr.jp/>）にも掲載されています。ここが広報委員会の悩み。活字情報（アナログ）の役割と重要性を十分承知しているが、ホームページ（デジタル）の広汎性と速報性にはかないません。編集企画、発行回数、執行機関からの独立性など、広報紙の在り方が来年の最大課題です。（Y. T）